様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 ２３ 日現在

機関番号：３２６８７
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2016
課題番号：２５８７０８０９

研究課題名（和文）主張における他者配慮の包括的理解および促進方法の開発

研究課題名（英文）Comprehensive Understanding and Promotion of Method of Consideration for Others when Making an Assertion

研究代表者
江口　めぐみ（EGUCHI, MEGUMI）

立正大学・心理学部・助教

研究者番号：４０５５０５７０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の主な目的は，主張における「他者配慮」の効果について包括的に把握するとともに，促進方法の開発を試みることであった。これまでの主張における他者配慮に関する研究知見を整理するとともに，面接および質問紙調査に基づき，他者配慮の状況や動機などを調査し，尺度を作成した。また得られた知見をもとにプログラム案を実施した。その結果「評価懸念」と「自他尊重」を区別することが他者配慮において重要であることが示唆された。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to comprehensively understand and promote the method of consideration for others when making an assertion. First, the consideration for others was clarified based on reviews of previous studies on assertion and through surveys and interviews of college students. Second, an intervention program was conducted for college students. The results indicated that respect for the self and others was positively affected, and negative evaluation negatively affected the consideration for others.

研究分野：発達心理学、臨床心理学

キーワード：主張性　アサーション　主張性　対人コミュニケーション

1. 研究開始当初の背景

主張性(アサーション)は「自分も相手も大切にしたコミュニケーション(平木, 1993)の能力・行動傾向とされ, 主張性を高める教育(アサーショントレーニング)が活発に行われている。主張性は, 自分の言いたいことを適切に主張する「自己表明」と, 他者(相手)のことも尊重しながら主張する「他者配慮」という自他の2側面が重要な要因に挙げられる。

これまでの主張性研究では, 国内外ともに自己表明の側面に焦点が当てられていた。すなわち「表明できるか否か」の行動面からの研究である。主張性の高さは, 心理社会的適応に寄与するとされており, 自己表明できることが, 適応的な主張と同義に捉えられてきた。

しかし, 協調を重視する日本においては,「必要な自己表明は行うが, 他者への影響や調和を考え, あえて主張しないことも選択する」といった, 独自の主張スタイルが見出されている。これらは一見「主張できない」消極的・不適応的な行動とも取れるが, 配慮をベースにした, 日本的価値観に合った1つの適応の形とされている。

こうした背景から, 近年では「他者配慮があるかどうか」の視点を加え, 主張性を再検討する研究が行われている(e.g.,柴橋, 2004;用松・坂中, 2004;渡部, 2009)。これまでの研究では, 他者配慮の能力が高いと, 心理的ストレスの緩衝要因となることや, 自尊感情の高さ, 周囲から承認やサポートを受けやすい等のポジティブな効果が報告されている(e.g.江口・濱口, 2012)。

一方で, 他者配慮のみが高い場合, 結果が男女で異なる(女子児童は内的・外的にも良好な適応状態が続くが, 男子児童は不適応的な傾向で, 教師からの評価が低い)ことや(江口・濱口, 2012), 男女とも他者配慮が高過ぎると, 精神的健康が低い(渡部, 2009)との報告もされている。

つまり他者配慮と適応指標との関連は, ポジティブおよびネガティブな効果をもたらすことが明らかとなっている。しかし, なぜ相反する結果が生じるのかは, 一定の研究知見が得られていない。

また現在, 教育現場では, コミュニケーション能力向上のために, 主張性トレーニングが盛んに行われている。しかし,「他者配慮」については, 理念上は重視されているものの, 上記のように相反する効果があり,「効果的な(＝ポジティブな結果をもたらす)他者配慮」も不明瞭であるため, トレーニングが困難となっている。

以上の背景から, 申請者は「他者配慮によって生じる効果を理解し, 関連する背景要因を理解することができれば, ポジティブおよびネガティブな効果の全体像を把握することができ,『効果的な他者配慮』の促進方法を開発することにつながる」という着想に至った。

なお研究にあたり「主張における他者配慮」を「自己の考えや感情を表明する際に、相手の感情・考え・正当な権利を損なわないよう図る心的努力(江口・濱口,2010)と定義して検討を行った。

2. 研究の目的

本研究では, 主に以下を目的に検討を行った。

【研究1.他者配慮の知見整理およびエピソードの検討】

主張における他者配慮の知見を整理するとともに具体的なエピソードについて調査し, 他者配慮の生起要因や効果について検討する。

【研究2. 他者配慮の背景要因と適応指標との関連】

研究1をもとに他者配慮の背景要因に関する尺度を作成し, 精神的健康との関連を検討する。

【研究3. 他者配慮と発達的要因との関連】

他者配慮の発達的変化について, 比較検討を行う。

【研究4. 効果的な他者配慮促進の手法開発】

上記で特定された要因をもとに, 効果的な他者配慮を促進させるための要因や手法を検討する。

3. 研究の方法

【研究1.他者配慮の知見整理およびエピソードの検討】

(1) 知見の整理

主張における他者配慮に関する記述について, 国内外の関連論文・文献や, 一般図書等から幅広く収集を行った。

(2) エピソードの収集

調査対象:関東圏内の大学生約 230 人

調査内容および手続き:個別記入式の質問紙により, 集団一斉方式で以下が実施された。

質問紙:「自己表現の際に行う他者配慮」について回答を求め、エピソード(具体的場面・動機・効果等)の自由記述を求めた。

【研究2. 他者配慮の背景要因と適応指標との関連】

調査対象:関東圏内の大学生約 150 人

調査内容および手続き:個別記入式の質問紙により, 集団一斉方式で以下が実施された。

質問紙:①他者配慮の動機に関する項目:目的1)で得られた調査結果に基づき作

成，②自尊感情尺度，③精神的健康尺度（GHQ30）

【研究3．他者配慮と発達的要因との関連】
研究申請当初，児童期の他者配慮（回顧式で回答）と大学生現在の他者配慮との関連について検討を行う予定であったが，予備調査において有意な結果が得られなかったため，計画を変更し，以下の調査を実施した。

（1）成人期における比較
調査対象：全国の大学生～60代の男女約1000名
調査内容および手続き：個別記入式のWEB調査
調査項目：①他者配慮の動機尺度，②自尊感情尺度，③精神的健康尺度（GHQ30），④他者配慮尺度（成人用），⑤評価懸念尺度

【研究4．効果的な他者配慮促進の手法開発】
（1）グループ・トレーニング
対象：大学生6名
アセスメント：実施前，フォローアップ（3か月後）の時点での面接と，以下を用いた
実施項目：①他者配慮の動機尺度，②自尊感情尺度，③精神的健康尺度（GHQ30），④他者配慮尺度（成人用），⑤評価懸念尺度，⑥自由記述

プログラム概要：これまでの主張性トレーニングを参考に，90分×5回のグループ・トレーニングを実施。概要は以下の通り。

Table1　トレーニング概要

第1セッション：	オリエンテーション 事前調査
第2セッション：	主張性と他者配慮 言語，非言語の主張
第3セッション：	主張性，他者配慮に関す 認知，他者から見た評価 (ロールプレイ)
第4セッション：	他者配慮における評価懸 念と，自他尊重
第5セッション：	振り返り，フォローアップ

（2）授業内でのトレーニング
アセスメント：実施前，フォローアップ（1か月後）の時点で以下を用いた。
実施項目：①他者配慮の動機尺度　②自尊感情尺度，③精神的健康尺度（GHQ30）④他者配慮尺度（成人用）⑤評価懸念尺度，⑥自由記述

4．研究成果

【研究1.他者配慮の知見整理およびエピソードの検討】
（1）他者配慮の頻度について
9割以上の大学生が「時々～いつも他者配慮をしている」と回答していた。

（2）他者配慮の手段について
男女とも，言葉，行動，表情が上位を占めていた。

（3）他者配慮の目的について
他者配慮に関する記述を大学生3名とKJ法にて分類した結果，5つの要因が抽出された。

Table2　他者配慮動機の記述分類

主分類・下位分類	回答例	割合
葛藤回避		**22.22%**
否定的影響の回避	相手に不快感を与えない／嫌な思いをさせない／迷惑をかけない	17.20%
平和的解決	その場を丸く収める／状況悪化が防げる	3.23%
葛藤回避	人と衝突しにくい／いざこざが起きない	1.79%
関係維持		**16.85%**
肯定的関係の維持	友人と良好な関係でいられる／友達と仲良く過ごせる	12.54%
コミュニケーション	意思疎通がしやすい／コミュニケーションが円滑に摂れる	2.51%
人間関係の促進	仲良くできる／みんなが楽しくなる	1.79%
自己表出		**14.70%**
主張の伝播	相手に自分の気もちが伝わりやすい／誤解を防ぐ	5.73%
自己肯定	元気と自信がつく／自己嫌悪に陥りにくい	4.66%
自己表現	自分らしさを表現できる／人に流されない	4.30%
印象形成		**23.30%**
好印象の促進	相手に好印象／親しみを感じてもらえる	8.96%
悪印象の回避	悪い印象を与えない／自分の評価を下げない	12.19%
印象操作	イメージを抱かせることができる／いい人にみせる	2.15%
集団適応		**17.20%**
周囲との同調	組織の中で浮かない／周りになじめる	8.60%
場の空気	場の空気を乱さない／場の空気が悪くならない	4.30%
社会的規範	礼儀・マナー／常識がある人間	4.30%

以上より，ほとんどの大学生は首長の際に他社配慮を行っており，その動機は相手や周囲との関係維持的な目的だけでなく，

印象形成や自己表出といった，自己の側面にフォーカスを当てた目的も多く見られることが明らかとなった。

【研究2．他者配慮の背景要因と適応指標との関連】
(1) 他者配慮動機の尺度作成
　因子分析の結果から，1因子構造8項目を採用した。他者配慮尺度とも高い相関がみられた。

Table3　他者配慮動機尺度項目

項目
周りの人になじむことができるから
周りの人に誤解されにくくなるから
周りの人と仲良くなりやすいから
周りといい関係でいることができるから
周りから好意的に見てもらえるから
人に嫌われにくくなるから
コミュニケーションがスムーズになるから
悪い評価を受けにくいから

(2) 適応指標との関連
　他者配慮動機の尺度得点の平均値をもとに高低2群に分類し，適応指標の比較を行った。
　その結果，自尊感情は低群＞高群，精神的健康は低群＜高群となり，他者配慮の動機得点の低い群が，有意に適応状態が高かった。
　この結果について，本尺度では因子分析において「関係維持」「印象形成」の項目が多く残っていた。よって大学生が認識する他者配慮は「周りと上手く関わり，よく思われたい」という意識が強く，「愛他的動機に基づく」という本来の「他者配慮」の構成概念とでは差があることが示唆された。よって「評価懸念」などの類似概念と区別する必要性が考えられた。

【研究3．他者配慮と発達的要因との関連】
　年代別の検討を行った結果，概ね【研究2】の結果と同様であり，顕著な年代別の差は確認されなかった。また男女別の比較を行った結果，男性＜女性において他者配慮の動機得点，他者配慮得点が高かった。児童，青年期においても女性は男性に比べて他者配慮得点が高かったが，同様の結果が示された。

【研究4．効果的な他者配慮促進の手法開発】
(1) グループ･トレーニング
　トレーニングの結果，事前と事後で評価懸念得点の低下がみられた。また，自尊感情得点に変化は見られなかったものの，面接および自由記述において，「相手にどう思われるかを気にして，行きたい場所や自分の意見を言えなかったが，トレーニングを通して，『自分の意見を言ってみて，お互いに話し合って決めればいいかな』と思って，実生活で挑戦してみた」のように，評価懸念による他者配慮でなく，自他尊重に基づいたコミュニケーションが可能になったことや，コミュニケーションに対する苦手意識が提言したこと等が複数報告された。

(2) 授業内でのトレーニング
　主張性に関するオリエンテーションと，「評価懸念による他者配慮」と「自他尊重に基づく他者配慮」の違いについてレクチャーと行い，ロールプレイを実施した。
　その結果事後の調査において，グループ･トレーニングと同様に評価懸念得点の低下と，自由記述において他者配慮に関する認識や行動のポジティブな変化が報告された。
　以上より，他者配慮を考える上で，「評価懸念」と「自他尊重」を区別して介入をすることが有効であることが示唆された。

　以上本研究では，他者配慮について包括的に検討した上で，その背景や価値観に合った主張性のあり方や，他者配慮を促進する新しい介入方法の提言を試みた。その点で，主張性教育および，我が国に特徴的な主張行動の理解に役立つと言えよう。今後は得られた知見をもとに，更なる介入方法および効果測定を行いたいと考える。

【引用文献】
①江口めぐみ･濱口佳和 (2012) 他者配慮の観点を含めた児童の主張性と内的･外的適応との関連　心理学研究，83，p141-147.
②江口めぐみ･濱口佳和 (2010) 児童の主張における「他者配慮」尺度の作成および主張性の類型化の試み　カウンセリング研究，42，p256-266
③平木典子(1993)．アサーショントレーニング――さわやかな自己表現のために――　日本精神技術研究所
④用松敏子･坂中正義(2004)．日本におけるアサーション研究に関する展望　福岡大学紀要，53，219-226.
⑤柴橋祐子(2004)．青年期の自己表明に関する研究　風間書房
⑥渡部麻美(2009)．高校生における主張性の4要件と精神的適応との関連　心理学研究，80，48-53.

5．主な発表論文等
(研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計　0 件)

〔学会発表〕(計　1件)
①江口めぐみ
なぜ主張の際に「他者配慮」をするのか
日本カウンセリング学会第 50 回大会
2017 年 9 月 23 日～2017 年 9 月 24 日
跡見学園女子大学文京キャンパス

〔図書〕(計　　件)

〔産業財産権〕

○出願状況 (計　　件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

○取得状況 (計　　件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者
江口 めぐみ (EGUCHI MEGUMI)
立正大学・心理学部・助教
研究者番号:40550570

(2)研究分担者
(　　)

研究者番号:

(3)連携研究者
(　　)

研究者番号:

(4)研究協力者
(　　)